

# ダーチャ・クラインガルテンの勧め

国土学アナリスト  
大石久和  
Hisakazu Obishi

二〇年以上家庭菜園をやっているが、農作というものは奥が深いものだと感じさせられている。

春になれば、昨年からの秋冬作物から春夏物の作物に土地を空けてもらう。その時、例年同じように耕作し、堆肥などを鋤き込むのだが、どういうわけなのか、毎年、同じように実ってくるものではないのだ。四季はどの年も、春・夏・秋・冬と巡ってくるけれど、同じ春がやってくることはないし、同じ夏が巡りくることもない。

作物で生計を立てなければならぬ農家は、この微妙な「春の違いや夏の変化」を読んでいるに違いない。素人農家にも、夏にはトマトなどの実りはやってくるのだが、この変化が読めずにいるから、恵みの違いに一喜一憂させられるのだ。

作物植物は、このように毎年の四季にあわせて変化するが、注意深く見てみると、雑草ですら毎年いつも同じではない。いつもなじみの雑草ももちろん生えているのだが、ある種の雑草が減ってきたと思えば、ある種がのさばってきた、という感じなのである。

## 強い植物

作物植物についての感想は最近のものだが、

不足対策として、フルシチョフが「一家に最低六〇〇平方メートル」の土地を与える政策を実施してからのものようだ。

これは、今日のロシアの知られざる力となっていると言われているように、ソ連が崩壊した時に、統計値的には餓死者が出てもおかしくない食糧事情だったにもかかわらず、まったく出なかった背景には、このダーチャがあったと考えている。

わが国では、市場に流通する作物の量がわが国の生産全量に近いといっても過言ではないだろうが、ロシアでは市場に出ない膨大な量の「ジャガイモ」などがあつたに違いないのだ。ロシア社会が統計には表れない「厚み」を持っているのである。

最近のロシアでは、このダーチャは花卉栽培やガーデニングを楽しんだり、年金生活者の自然豊かな郊外住宅として利用され、ダーチャの売買も盛んだというのだ。

ドイツのクラインガルテン（「小さな庭」の意）は有名である。十九世紀頃から開発された集団型・賃貸型・宿泊型の市民農園で、都市化に伴う劣悪な環境下にあった人々が自然にふれあう必要性から生まれたものだという。

ドイツの都市住民の多くが、週末には自然豊

昔、雑草について考えさせられたことがある。若い頃、建設省の道路事務所に勤務していたときに道路植生について少し研究した経験がある。その成果は、先輩や後輩たちの一連の努力により、奈良県の一般国道24号橿原バイパスの一部区間が「森に包まれた道路」となることで引き継がれている。

東日本大震災からの復興に関して防潮堤をより強固にするために、根がまっすぐに伸びる「直根性」樹木による植生を行った例がある。これは、横浜国立大学の宮脇昭名教授が主導する潜在自然植生（地域には、鎮守の森のように地域ごとに固有の究極林相を形成する植生があり、それが最も強い林相である）理論に基づくものであった。

橿原バイパスも同じ考えによるもので、奈良盆地の気候に合致したこの地方の鎮守の森の林相のシイ、タブ、カシなどの二〜三年生のポット苗を植えたのであった。このせいぜい五〇センチほどの樹を植えた道路環境施設帯は、今日では一〇センチを超える「森」に育っている。

このときに、強い雑草と弱い雑草について学んだことがあり、これはその後の自分の考え方にかんがりの影響を与えることになった。それは、道ばたの誰もが踏んでいくようなところに生えている草は、「踏まれても踏まれても生き延び

かな三〇〇平方メートルほどの環境で家族でゆったり過ごすというのである。ここにも市場には出ることのない大きな農業生産力が隠されており、日本にはほとんど存在しない「統計外の社会」が構築されているのである。

## 自然への回帰

わが国でも、大都市近郊の家庭菜園が町村などから提供されると何倍もの競争になるほど人気があるのだが、その広さはたかだか数平方メートルにすぎない。市民農園整備促進法などができているのだが、消防規制やトイレなど、求められている施設があまりに高水準で高額となり、なかなか普及の兆しが見えないと言われている。

高速道路の整備により、週末に宿泊が可能であれば一〇〇〜二〇〇平方メートルの自分の「小さな菜園」を三〇〇平方メートル程度確保することは困難ではなくなっている。東京から、一〇〇〜二〇〇キロメートルで水戸・宇都宮・前橋の距離、二〇〇〜三〇〇キロメートルで福島県郡山市やいわき市といった距離になる。

耕作放棄地などを活用し、ダーチャやクラインガルテン程度の施設で週末生活を送ることができ、都市住民には癒やしをもたらされ、地方では地域が活性化するのである。

ている。なんと強い草なんだろう」と思ってしまったのだが、そうではないというのだ。

実は、こうした草は「他の草が繁茂できるような環境では、すぐに他の草との競争に負けて枯れてしまう」のだ。だから他の草が生存することができないような「頻繁に人に踏まれる」といった「厳しい環境に追い出された弱い草」だということである。

「なんとそういうことだったのか」という驚きは、それから何十年も経ったいまでも鮮明だ。「強い」「弱い」という単純なことが、まったく単純なことではなかったのだ。

## ダーチャ・クラインガルテン

こうした過去の経験と現在の農園との付き合い合いなどもあって、植物との豊かな関係構築は人生に不可欠なものではないかと考えるようになった。そうした意味でも、コンクリートジャンダルのなかだけでの生活は、人間のなかの大切なものを奪われているのではないかと感じてしまっているのである。

ロシアには、ダーチャと呼ばれる家庭菜園がある。その起源は古いようで、十一世紀からだとか、ピョートル大帝時代とかいろいろあるようだが、現在のダーチャの普及は国民の食糧